

氏名(本籍)	谷川彰英(千葉県)
学位の種類	博士(教育学)
学位記番号	博乙第1,143号
学位授与年月日	平成8年1月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	教育学研究科
学位論文題目	柳田国男における教育思想形成と社会科教育論の展開
主査	筑波大学教授 教育学博士 山本恒夫
副査	筑波大学教授 門脇厚司
副査	筑波大学教授 斉藤太郎
副査	筑波大学教授 教育学博士 草薙進郎
副査	筑波大学教授 博士(文学) 高桑守

論 文 の 要 旨

1. 本論文の目的

本論文の目的は、日本民俗学の創始者として知られる柳田国男の教育思想がどのように形成されてきたかを明らかにするとともに、なぜ柳田が戦後新設された「社会科」に大きな期待を賭けて社会科教育論を展開したか、さらにはその今日的意義を柳田の後継者の研究を含めて検討することにある。

2. 本論文の概要

第I部「柳田国男における教育思想の形成」第1章「柳田国男における教育思想の原型」においては、柳田の教育思想の原型がすでに東京帝大卒業後の農政官僚時代にあったことを明らかにした。柳田国男の学問の出発は文学にあったが、柳田はその後農政学を志した時点で、一人一人の主體的な判断力を養うことが農民教育ひいては教育そのものの原点であることを指摘していた。やがて「地方研究」に進み、さらに大正時代から昭和期の初めにかけて、柳田は「郷土研究」を推進する。それが基盤となって「民俗学」の体系化が進められることになる。

第2章「日本民俗学の成立と歴史教育論」では、柳田が創設した日本民俗学の方法論を検討し、それが柳田の歴史教育論にどのように影響しているかを明らかにした。ここでは柳田の民俗学の方法論として知られている「方言周圏論」と「重出立証法」の論理を分析し、それが彼の主張した「常民史学」の方法論に強い影響を与えていることを指摘した。「方言周圏論」は「蝸牛」を事例にして、方言の伝播を論じたもので、言語の「時代差」と「地域差」にかかわる方法論である。これは『蝸牛考』(1930年)によって明らかにされた。また、「重出立証法」は歴史を「横断面」として見る手法であり、各地に残存する民俗資料を比較することによって歴史を解き明かそうとするものである。その代表的な著作が『明治大正史世相篇』(1931年)である。柳田の民俗学は歴史教育論に貴重な視点を提供している。柳田は当時の英雄中心の歴史教育を厳しく批判し、「常民」の生活を中心とした歴史教育こそ必要であることを強調して、何よりも歴史というものに終生関心を持ち続けるような内容と方法を模索すべきだとした。柳田はそれを「史心」の育成と呼んでいる。

第3章「伝承的世界と国語教育論」では、柳田の歴史教育論及び社会科教育論を深く分析するために、国語教育論について分析した。民俗が「伝承」を中核に成立していることからみても、柳田の強調した「前代」の教育法は文字ではなく、口頭伝承を中心に行われてきたので、柳田は「前代」の教育法を重視すべきとの立場に

立って、「児童分類語彙」の収集を行い、昔話や謎や諺の教育的機能にも着目した。

第4章「柳田国男の児童観と子ども向けの著作の位置」では、柳田児童観を探るとともに、柳田自身が子ども向けに書いた著作をとりあげ、彼の教育思想の具体的な姿を分析した。『小さき者の声』（1933年）には「過去保存的子ども観」が見られるが、『子ども風土記』は柳田の児童観の集積とも言える著作である。さらに『火の昔』（1944年）は、柳田の歴史教育論を反映した歴史教科書のような存在である。

次に第Ⅱ部「柳田国男の社会科教育論」第1章『『社会科』の成立と柳田国男』では、戦後新設された「社会科」に柳田がなぜ大きな期待を賭けたかを、その戦後の発言を追うことによって明らかにした。柳田は自らの学問と教育思想の全体を賭けて、「柳田社会科」と呼ばれる教科書作りを行った。

第2章『『柳田社会科』の内容と方法』では、柳田が中心となって作られた「柳田社会科」がどのような理論のもとに構成されて実践されたかを明らかにした。柳田は「社会科」を「世間教育」ととらえ、そも目的を「かしく正しい選挙民の育成」に置いた。柳田社会科の研究は成城学園初等学校の教師たちとの共同研究として開始され、『社会科の新構想』（1947年）、『社会科の諸問題』（1949年）、『社会科単元と内容』（1951年）、『社会科教育法』（1953年）と続き、1954年から使用された『日本の社会』が実業之日本社から刊行されたが、1963（昭和38）年には発行を取りやめている。

第3章「柳田国男の歴史教育論の発展と継承」では、柳田の思想を継承しようとしてきた幾つかの試みを分析している。まず、柳田国男の歴史教育論をその教科書論から検討し、その後の継承者について言及した。和歌森太郎は柳田の第一の後継者と言ってよいが、和歌森は1953（昭和28）年に柳田と共著で『社会科教育法』を著しており、柳田の歴史教育論の総集成を図っている。酒井忠雄は歴史学から出発しながら、戦争体験を経て柳田国男にアプローチし、そこから「社会科」教育と歴史教育の関係を根底からとらえ直そうとした。

第4章「柳田国男の社会科教育論の継承」では、著者が柳田国男の社会科教育論を継承して切り開いた「地名教育」論を提出している。「地名教育」は柳田国男の後継者と目されている谷川健一の地名研究に示唆を得ながら、著者が開拓してきた分野である。柳田国男は1936（昭和11）年に『地名の研究』を著しているが、その地名研究を受け継いで谷川健一は多くの地名研究の成果を著している。ここでは筆者が開発した地名教育の7つの事例のうち、「木下」「新宿」「日本橋」を取り上げ、それぞれの事例ごとに地名教育の実践的戦略を明らかにした。

なお巻末の「柳田国男の教育関係著作目録」と「柳田国男の教育思想研究文献書誌」は、入手可能な柳田国男の教育思想研究の全文献を網羅したものである。

審 査 の 要 旨

本論文は柳田国男の社会科教育論の特質を解明し、それを継承して著者が開発した地名教育論を提出したところに特色があり、その点は高く評価される。本論文は柳田の教育思想形成の分析を行って柳田の社会科教育論の特質を導き出しているが、これは先行研究にもなく、社会科教育学に大きな貢献をしたといえる。また、著者の地名教育論は社会科教育の新しい分野を開拓したものであり、そこにすぐれた独創性がみられる。

ただ、柳田の社会科教育論が戦後の社会科教育学の中でどのような位置を占めているのかという点についての分析がやや不十分である。

しかし、そのことによって本論文の成果がそこなわれるものではない。

よって、著者は博士（教育学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。